

街に顔があつた頃

浅草・銀座・新宿

吉行淳之介

開高健



新潮文庫

まち かお ころ
街に顔があった頃
—浅草・銀座・新宿—

新潮文庫

か - 5 - 20



昭和六十三年二月十五日 印刷
昭和六十三年二月二十五日 発行

著者

開高健
吉行淳之介

発行者

佐藤亮一

発行所

株式会社 新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(〇三)二六六—五一一
編集部(〇三)二六六—五四四〇

振替東京四一八〇八番

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・錦明印刷株式会社 製本・錦明印刷株式会社
© Takeshi Kaikô 1985 Printed in Japan
Junnosuke Yoshiyuki

ISBN4-10-112820-0 C0195

新 潮 文 庫

街に顔があった頃

——浅草・銀座・新宿——

開 高 健 著
吉行淳之介



新 潮 社 版

4015

まえがき

吉行 淳之介

開高健氏たけしとの長時間対談が『美酒について』という本になったのは、もう三年前（昭和五十七年）のことになる。これがなかなか好評で、編集部から「今度は都会についての対談をしないか」と申し入れがあった。

相手が開高健氏であれば、相槌あいづちを打っていれば話はすすんでゆくから、とおもって承知した。当節流行の「都市論」風のを予想していたのだが、どこでどう間違ったか、いや、間違うヒマもなく、話はたちまちワイダンになってしまった。

この対談は、昭和五十九年の冬、夏、秋と三回おこなわれたが、この年はどういう年だったか。そのことについてある機会に私が書いた短文がある。

『この年、冬は幾度も大雪が降り、夏は記録的の猛暑がつづく。気候不順のため、アレルギーで苦しみ、病臥びようがの日が多い。台風が一度も上陸しなかったのも、異変の一つである』
こういう按配あんぱいだったから、対談において異変が起ってもムリはないといえるのだが、

「いま、対談でワイダンをする時代かなあ」

と、踏^{ため}らったことも事実である。

オ××コという言葉が、世の中にたいして何らかのショックを与えた時代もあった。しかし、いまはそれは日常茶飯^{さはん}の言葉になってしまっていて、そういう時代にワイダンをして仕方あるまい、という程度の意味である。

しかし、話はどんどんワイダンの方向ですすんでゆき、もはや止めようがない。

そこで、私は覚悟した。

「こうなれば、立派な猥談^{わいだん}対談にしてやろう」

「立派」というのはなにも漢字で鹿爪^{しかづめ}らしく構えなくても、「リッパ」でいいのだが、そのためには今の時代ではまず「風雅」でありたい。これは、まあ、開高健氏と話をしていれば、おのずからそうなつてゆくだろう。

もう一つ、「テツガク的」でありたい。このほうは、「哲学的」と漢字になるとすこし煩^{わづら}わしい。片仮名ぐらいでいきたいのだが、ここは開高健氏に下駄^{げた}をあずけることにしよう。

そういうわけで、一月の大雪の日にはじまったこの対談は、三回にわたって徹頭徹尾ワイダンになった。そして、これはこれで、なかなかの出来栄^{できば}えになった、とおもっている。

昭和六十年になり、二月十三日に「新風営法」というのが施行された。これに関連して、

私の年代ですぐに思い出されるのは、昭和三十三年三月三十一日である。つまりは「売春防止法の施行」であり、このときには街の灯ひが消えてしまったが、今回は午前零時になると消えるだけで、大きな違いである。

逆にいえば、午前零時までは法律の認める範囲のものとして認められたわけであり、そこからみ出したホテル、マントルなどは、はつきり地下に潜ったことになる。

テレビ学問によつて、私は新宿歌舞伎町かぶきちょうをはじめとする新しいセックス産業には詳しい。しかし、この対談ではそのことには触れなかった。じつは、あまり興味がないためだ。これは、年齢としのせいばかりではなく、もともとあまり興味がもてなかった。

赤線地帯が廃止になり、やがて形を変えて新しい性風俗が再登場しはじめた。そのころのもの一つに、「おさわりバー」というのがあった。これに私は馴染なじめなくて、とうとう一回しか行かなかった。その一回というのは昭和四十一年のことで、その頃の私ころはまだ若いといつてもいい。

そのときのことを書いた随筆があるので、それをここに再録してみよう。四国の松山での話である。

若い芸者を一人連れて、町へ出た。

繁華街の裏通りの入口から眺めると、酒場の袖看板が折りかさなるように並んでみえる。酒場の密度は全国一、二を争い、その上これらの酒場を利用する客のうち、旅行者の占めるパーセンテージはさして大きくないそうである。つまり、松山には飲み助が揃っているということだ。

私たちは、この町の一流のクラブへ行き、つづいてキャバレーに行ってみたが、これは特に報告することはない。

比較的報告に価するのは、繁華街にあるMという小さなバーである。

「女のくるところではないよ」

と、まず芸者を帰す。

ボックスに座ると、女の子がするするとパンティを脱いで、膝の上に載つかってくる。いわゆる「おさわりバー」のありふれた景色だが、美人のマダムが率先して挺身奮闘しているところが勇ましい。

こういう店は、いささかミもフタもない感じで、あまり出かける気持にはならない。

もつとも、面白いことが一つあった。私の膝の上に載っている女の子が、

「あたし、ちよっとオシッコをしてくるからね」

と床の上に降り立つと、脱ぎ捨ててあったパンティをわざわざはいて、出かけて行った。

まわり歩いた酒場のうちの一軒で、若いボーイが礼儀正しく話しかけてきた。

「失礼ですが、——先生ですか」

「そうです」

「赤線復活論者として有名な先生ですね」

私は苦笑して答える。

「そうです。君たちのために努力しているのだが、どうも期待に沿えなくてねえ……」

「赤線」跡の松ヶ枝町まつがえちようへ行くことにして、タクシーに乗る。東京を離れて、しみじみ感じることの一つは、タクシーの運転手がおっとりしていることである。

電話でタクシーを呼ぶと（ハイヤーではない）、運転手が降りてきてドアを開けてくれる。まるで、キツネに化かされているような気分だ。

タクシーに乗って、

「松ヶ枝町」

と言うと、若い運転手君が、

「松ヶ枝町より、町のほうが、いい女がいますよ」

「町には、いい女がいるのかね」

「いますとも、昼間はデパートに勤めたり、洋裁学校へ行っている女がいます」

こういうときの台詞は、どこでも同じである。

「なるほど、それで値段はいくら」

「二千円ですよ」

「それは泊りの値段ではないね」

「ええ、時間です」

「時間というと、四十分くらいか」

「そうです、よくご存じで……」

「しかし、二千円とは廉やすいな。籠かごぬ抜けされる値段だな」

「そんなことはありませんよ。でも、廉いと言っていたら、話しやすいです。この前、九州のお客さんに乗せて同じことを言ったら、それは高い、自分たちの土地では六百円だといわれましてねえ」

「ともかく行ってみよう。怖くないところへ案内してくれ」

小さな宿屋の前で、車が停とまった。運転手と別れて、応接間風の部屋へ通される。白い割かわ烹着ほうぎのおばさんが出てきた。ここらあたりも、全国共通の情景である。

若い女が一人、ちらりと顔をみせて消える。感心できない。もう一人、顔をみせる。これも感心できない。女将おかみに、千円札を一枚顔見せ料として渡してその家を出た。こういう場合は、

一人二百円ほどの金を渡せばいいわけだが……。応接間で女が顔をみせるのを待っている時間は、凝縮したなかなか良い時間である。その時間のために、私は余分の金を払ったわけだ。その家を出るとタクシーが走っていないので、表通りまで歩いて行く。うしろから空車札の電灯をつけたタクシーが走ってくる。

手をあげて停め、車内におさまった瞬間、

「おや」

と、運転手が言った。

たった今、私を旅館まで運んだ車なのである。

「駄目^{だめ}でしたか」

「あまり良くなかった。ぼくは美人好みじゃないのだがね」

運転手は、さかんに恐縮する。彼としては旅館からのリベートを貰^{もら}えなくなつたわけだ、不機嫌^{ふきげん}になつてしかるべきなのだが、そういう点、地方のタクシーは素朴^{そぼく}というか鷹揚^{おうよう}というか。その運転手に、「松ヶ枝町へ行つてくれ」とは、当てつけがましい感じなので、町のキャバレーへもう一軒案内してもらつた。

車代を払おうとすると、

「いいですよ、いりませんよ。お客さん」

と辞退するのに、無理に押しつける。

そのキャバレーについては、書くことがない。短い時間で外へ出ると、今度こそ松ヶ枝町へ直行する。

休日の前の夜、十一時ごろである。それなのに、坂道には遊客の姿が、一人も見当らない。異常とおもえるほど、閑散としている。

坂道を登り切ったところの路地で、ここでも白い割烹着の女が声をかけてくる。人の良さそうな笑顔である。

案内されて、部屋に入る。

「いくらだ」

「時間で千五百円」

「時間というと、四十分だね」

「いいえ、もっと短い……」

「それじゃ、ショート・タイムのことか。十五分くらいか」

「もうすこし、三十分くらい」

またしても、そういう会話。そして、女たちがつぎつぎに、顔を見せはじめ。

目

次

まえがき……………三

浅草綺譚……………一七

格物致知の渡し舟……………二〇

頭の上に「光風霽月」……………二四

名筆で初春を寿ぐ……………二九

毒蛇の顎に驚くなかれ……………三三

「遊びをせんとや生まれけむ……………三五

これが現場の人間か！……………三六

ある晴れた日、どんでんがくる……………三八

見事なキスはプール・ソワ……………四三

口惜しいから、も成り行き？！……………四六

性生活のナチュラリスト……………五〇

急がず、あわてず、騒がずに……………五三

もう一つの銀座ビギン……………五七

ガラと品の違いというけれど……………六〇

娼婦の数は昔も今も

ラブホテルのない街・銀座

これが東西「帯結べます」

鏡に向かつて、まず「見るな！」

女子大で匂いを学ぶ

チラと一瞥、この心理

香水は自由な恋のために

銀座のバーに入るにも……

鰻の小骨で苦い経験

出鼻をくじいて親善外交

紅燈みおろす仙郷で……………一〇五

ミンクをまとって「不景気なのよ」

「今日も駄目かな」で転落事故

験^{げん}を担ぐ女——盛塩VS.パンティー

エディット・ピアフは冷感症?!

タブーがあれば色気が咲くか

キュートをフランス風に訳せば

三

九

三

五

六

八

七

九

六

九

八

三

六

九

四

六

《プレイ・タイム》

小説家の密やかなる愉しみ

二三

魔羅珍学入門

二三

情熱あればすべてよし

三八

【向学心旺盛な方のために】

..... 一四二

あとがき ●この本を買った君は.....

..... 一五四

解説 山本容朗
カット 和田誠

街に顔があつた頃ころ

— 浅草・銀座・新宿 —